Title	徳富蘇峰と平民主義(グローバリゼーション研究)
Author(s)	豊川, 慎
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-1
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2213
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

【グローバリゼーション研究】
徳富蘇峰と平民主義

2010年３月１日（月）、聖学院本部新館２階において､2009年度第４回「グローバリゼーション」研究会が開催された。大東文化大学法学部教授の和田守氏を講師にお招きし､「徳富蘇峰と平民主義」と題する発題を伺った（研究会出席者は21名）。以下、発題の概要を記す。

長谷川如是閑と並んで近代日本を代表するジャーナリストであった徳富蘇峰（本名は猪一郎）は1863（文久３）年に熊本県水俣に横井小楠の高弟徳富一敬の長男として豪農の家に生まれた。作家の徳富蘆花は弟、実業家であり政治家の湯浅治郎は義兄、日本基督教婦人矯風会の創立者矢島楫子は叔母にあたる。蘇峰は花岡山での熊本バンドの結盟（1876年）に最年少者として加わり、その後同志社英学校に入学し、新島襄より受洗。1980年、同志社を退学し、教会（京都第二公会）からも退会し、新聞記者になろうと上京するもそれを果たせず、熊本に帰り、民権私塾である大江義塾を経営しつつ自由民権運動に参加。1987年、民友社を設立し、『国民之友』を創刊し、「平民主義」を提唱。1894年の日清戦争に際して『大日本膨張論』を出版し、それ以後強硬な国家主義、帝国主義を唱導し、体制派ジャーナリストとして国論をリードしていった。

和田氏は以上のような蘇峰の生涯を概説した後、蘇峰の「平民主義」の形成過程と思想構造を論じられた。蘇峰が言う「平民」とは「士族」に対する対抗概念であり、そこには「貴族」的欧化政策と「士族」的政治行動への批判が込められていた。平民主義の唱導は近代国家形成における国民的基盤の確立の重要性の主張、すなわち下からのナショナリズムや立憲政治の樹立の主張であったのだが、平民主義は革新性と同時に体制を補佐する側面をも併せ持っていた。国家膨張主義の提唱がそれである。また大正初期から女性参政権を含む普選論を蘇峰は提唱したが、それは主として「皇室中心主義」という国民道徳論のオピニオン・リーダーとしてのそれであった。和田氏によれば、蘇峰の平民主義は当時の学生たちにも大変魅力あるものとして捉えられ、明治国家体制の確立期の言論界をリードした思想の一つであったが、滅私奉公型の愛国心や疑似自治心など問題点を多々含んだものでもあった。

質疑応答の際に特に議論されたのは蘇峰の思想における「キリスト教」の位置や影響などについてである。例えば、1957年の蘇峰の死去の際、彼の遺言により、赤坂霊南坂教会においてキリスト

講師の和田守大東文化大学教授

教式の葬儀が行われたのであるが、若き日に熊本バンドの結盟に参加したもののその後に教会を離れ、国家主義・帝国主義的思想を唱導した蘇峰の生涯と思想にとってキリスト教が結局はどのような位置を占めていたのかという問いである。その他にも様々な質疑が活発になされ、実り多い研究会の時となった。

（文責：豊川慎　聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2010年３月１日、聖学院本部新館２階）